子ども理解から具体的指導・援助へ

子どもの友だち関係をどうとらえるか

前田健一

人数や程度は学級間で違っても、たいていの学級には友だちから好かれる子ども、反対に嫌われる子ども、目立たず無視されやすい子どもが何人かいるものである。人気度はあくまで学級集団の中で相対的に決まる。だから、別の集団に入れば、何かのきっかけで人気度も変わる可能性がある。しかし、一定の期間にわたって同じ学級集団に所属する子どもたちにとって、今自分が友だちからどの程度受容されているかは重要な意味をもつ。友だちから好かれている子どもは学校へ行って友だちと出会うのが楽しみであろうが、拒否されたり無視されている子どもは学校生活に苦痛を感じているかもしれない。あるいは今は苦痛を感じていなくても、近い将来に孤独感や不満感を自覚するようになるかもしれない。

このように子どもの人気度、友だちの数、友だち関係の中味などには早くから大きな個人差が見られる。どのような発達側面にも個人差はあるので、個人差そのものはそれほど問題ではない。むしろ大切な問題は、良好な友だち関係を作ったり維持できないことが、子どもの情緒的・社会的発達や精神的健康に否定的な影響を及ぼす

か否かである。残念ながら、これまでの研究を総合すると、この答はイエスとなるのである。

1、子どもの友だち関係はなぜ大切か

たいていの人が認めているように、子どもは友だちとの対人関係を通して、情緒的にも人格的にも成長し、社会的適応に必要なさまざまな知識・技能・行動様式を身につけていく。もちろん、子どもは当事者として自分の友だち関係に影響を与えているが、同時に友だち関係から無数の恩恵と影響を受けている。アッシャーとパーカー(1)は、これら無数の恩恵や影響を整理し、友だち関係の果たす主要な役割を七つにまとめている。これを参考にしながら、まず良好な友だち関係の効用について少し考えてみよう。

①子どもの社会的スキル（social skills）や社会的コンピテンス（social competence）の発達を促進する。

②情緒的・精神的な支えとなり、子どもの自尊心や自己価値観を高める。

③不安や脅威を感じる場面では、情緒的な安全保障としての役割を果たし、子どもの自信、勇気、希望、チャレンジ精神を引き出す。

④考え、気持ち、活動などを共有する体験と助けあいを通して、相互理解や相互尊重、親密な自己開示と信頼感、友情、思いやりを育てる。

⑤建設的な批判や忠告を与えたり、社会的ルールや遊び方を教えたり、カウンセラーやモデルとなって、さまざまな知識や援助を提供してくれる。

⑥信頼できる友だちとの関係は連帯感、誠実さ、責任感などを養う。

⑦友だちと一緒に遊んだり会話する経験を通して、子どもは友だちづきあいの楽しさ、興奮、満足感を味わう。

また、互いに刺激しあって自由で創造的な世界を作り出す。

①の役割を理解するためには、社会的スキルと社会的コンピテンスとは何かについて少し説明を追加しなければならない。一口で言うと、社会的スキルは対人関係を円滑に営むために必要な対人行動のすべてのことである。質問する。挨拶をする。援助を求める。不当な要求を上手に断る。不平や不満を相手の感情を害さないようにうまく言う。相手に好意や関心を示したり、会話のやりとりを上手に進める。自分から関係づくりの働きかけをしたり、相手からの働きかけにタイミングよく応答する。これらは、社会的スキルのほんの一例にすぎない。このように多様な社会的スキルを場面や相手に応じて上手に使い分けるためには、的確な状況判断と相手の考えや気持ちを理解する能力が不可欠である。社会的コンピテンスは共感性、役割取得能力、友だちとのトラブルをうまく解決する対人的問題解決能力などを含む総合的な社会的能力と社会的知識に優れていることであると考えればわかりやすい。

友だち関係は、これら七つの役割を通して子どもの全体発達を促す人間的環境と機会を提供するのである。だから、友だち集団から無視されたり拒否されやすい子ども、親密な友人を作れない子どもは、単に遊び相手や情緒的・精神的な支えを失うだけでなく、大切な社会的学習の機会と環境をも失うおそれがある。その結果、友だちから受容されない考えや行動を示し、ますます孤立して、良好な友だち関係を築けなくなるのではないかと心配する。

2、友だち関係のとらえ方

子どもの友だち関係を理解し、友だち関係に問題を抱えている子どもを早期発見することは口で言うほど簡単ではない。医学で言う診断（心理学ではアセスメントという）を誤ると、具体的指導や援助も見当違いとなり、よけいに問題をこじらすことにもなりかねない。子どもの友だち関係を的確にとらえるためには、いろいろな角

度から情報を集めて慎重かつ総合的に判断しなければならない。これまでよく利用されている情報の収集法は、次のようなものである。

(1)教師や大人が子どもを直接観察する

友だち関係を理解する最も基本的な方法は観察法である。教師は日常的にどの子が誰とよく遊ぶか、友だち関係の中でどのような地位を占めているかなどを観察できる機会に恵まれている。しかし、漠然と観察しているだけでは全体的印象がわかるだけで、意外と具体的指導や援助の手がかりを発見できないものである。他の子どもに話しかける。提案する。慰める。批判する。人の話に割り込む。邪魔する。命令する。悪口を言う。できるだけ、このような具体的行動カテゴリーを決めて観察することを勧めたい。たとえば、引っ込み思案の子どもは友だちからの働きかけに対する応答では他の子どもと同じ程度であるが、決して自分から働きかけないという観察結果を得ていれば、具体的指導や援助の目標行動を決定しやすい。

観察法は注意深く実施すると、友だち関係について具体的かつ貴重な情報を提供してくれるけれども、実際にはあまり利用されていない。最大の理由は、学級全員を観察するには多くの時間と労力を要するからである。また、学年が上がるにつれて、否定的な対人行動や友だち関係を左右する決定的なやりとりは、だんだんと教師の目の届かないところで生じるようになるからである。

(2)教師・親・仲間が子どもの行動特徴をアセスメントする

これは子どもと日頃かかわっている人から、子どもについて評価してもらう方法である。たとえば、「自分の思うとおりにならないと、すぐに怒る」とか「人の話や作業の邪魔をする」などの行動特徴を記述した項目リストをあらかじめ作成しておき、それぞれの子どもがどの程度各項目に該当するかを評価していく。評価者が誰であるかによって、教師アセスメント、親アセスメント、仲間アセスメントと呼ばれる。評価の仕方は、各項目特徴

が該当するか否かの二者択一でチェックしたり、「よく見られる」～「全然見られない」までの五段階や七段階で評定したり、各項目の特徴を示しやすい順に子どもを順位づけたり、各特徴を顕著に示す子どもを数人だけ指名するといったやり方をする。

これらのアセスメント法は、子どもの問題行動を見当づけるのに役立つし、具体的指導の前後に実施すると指導の効果を評価するのに役立つ。しかし、特に教師・親アセスメントでは一人の評価者に頼る場合が多いので、評価者の先入観や観察機会の多い目立ちやすい特徴に左右されないように留意しなければならない。

(3)子ども全員にソシオメトリックテストを実施する

ソシオメトリックテストは指名法、評定法、一定比較法などに大別される。最近では指名法と評定法がよく使用されている。たとえば「一緒に遊びたい人」などの選択基準に従って、子どもに級友の中から一定数（通常は三名前後）の級友を指名させるのが指名法であり、級友全員について遊びたい程度を三段階または五段階で評定させるのが評定法である。級友から受けた指名数の多少に基づいて受容度や人気児、拒否児などの地位分類はできるが、なぜ人気児あるいは拒否児なのかの理由については何も教えてくれない。なお、地位分類の詳細については前田・片岡（2）を参照されたい。

コーイとドッジ(3)は、小学三年生と五年生を五年間にわたって追跡調査し、ソシオメトリック指名法と仲間アセスメントを定期的に実施した。指名法の結果から人気児、拒否児、無視児などを分類したところ、拒否児の地位は四年間を通じて最も安定していた。つまり、拒否児は一年後で四五％の者が、二年後と三年後では三四％の者が、四年後でも三〇％の者が相変わらず拒否児のままであった。また、拒否児はどの学年でも協調的でなく、リーダーでもなく、破壊的であり、よくけんかをしかけると仲間から見られていた。この結果は教師が指導や援助をしないと、自分では友だち関係を改善できない子どもがいることを示唆する。仲間アセスメントからわかる

ように、彼らは相変わらず否定的な対人行動を示しやすいのである。

(4)子ども自身から自己報告を求める

子どもの社会的スキルや社会的コンピテンスと関連する多様な問題を測定するために、自尊心や自己概念(4)、孤独感、対人関係の成功と失敗の原因帰属、不安、怒り、自己効力感、自己主張性などの自己報告尺度が作成されている。クリックとラッド(5)はソシオメトリック指名法の結果から小学三年生と五年生を人気児、拒否児、無視児などに分類し、彼らの社会的不安感、社会的回避感、孤独感、原因帰属スタイルなどを比較している。その結果、拒否児は無視児よりも不安感を強く感じ、どの群よりも孤独感を最も強く報告した。また、自分の知っている仲間が自分を嫌っていると想定させ、その原因を帰属させたところ、拒否児は「それは相手の子どもが誰でも嫌いだから」と自分以外の原因に帰属させる傾向にあった。

最近、社会的スキルの習得と実践練習を行い、子どもの友だち関係や社会的適応を改善しようとする社会的スキル訓練が成果をあげている。訓練の詳細と実際編に関心のある方はミッチェルソンら(6)の本を一読されることを勧めたい。

(愛媛大学助教授)

〈引用文献〉

(1)Asher, S. R., & Parker, J. G. 1989 Significance of peer relationship problems in childhood. In B. H. Schneider, G. Attili, J. Nadel & R. P. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. pp.5-23. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

(2)前田健一・片岡美菜子　一九九三　幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント　教育心理学研究、41、一五二-一六〇。

(3)Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.

(4)Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York: Pergamon Press. 高山巌（監訳）佐藤正二・佐藤容子・前田健一（訳）一九九二 自尊心の発達と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる—岩崎学術出版社

(5)Crick,N.R., & Ladd,G.W. 1993 Children's perceptions of their peer experiences: Attributions, loneliness, social anxiety, and social avoidance. *Developmental Psychology*, 29, 244-254.

(6)Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social Skills assessment and training with children*. New York:Plenum.

高山巌・佐藤正二・佐藤容子・園田順一（訳）一九八七 子どもの対人行動—社会的スキル訓練の実際—岩崎学術出版社